

ガラス工芸はさまざまな技法により職人の手で一つずつ丁寧に作り上げられる日本の伝統工芸品の一つである。そんなガラス工芸の世界で活躍されているのがガラス工房KAZEの長谷川直良さんだ。初めて開催したガラス展『風に吹かれて』から“風”という文字を取って工房にローマ字で“KAZE”と名付けた。

「年配の方だとボブディランの曲“風に吹かれて”をイメージするかもしれませんが、そんな格好いいものではなくて、“男はつらい

よ”の寅さんのような、あっちにフラフラ、こっちにフラフラといったイメージです(笑)」

茶路小中学校や白糠中学校で教員を務めていた長谷川さん。元気なうちに好きなことをやりたいと、57歳で早期退職しガラス作家の道を目指した。2年間は東京のガラス工芸研究所でガラスの勉強をし、その後の1年間は石川県の能登島ガラス工房で学んだ。

「元々ものづくりが好きで、竹とんぼやブーメラン、とんぼ玉など、いろいろなものを作っていたんだ

けど、中でもガラスは奥が深くって、ガラスのことをもっと知りたいと思ったのが、ガラス職人を目指した始まりだね」

今年の6月、長谷川さんの生まれ故郷である山形県鶴岡市でガラス展を開催した。芸術文化施設と温泉内の展示ギャラリーを会場に2週間で述べ1000人が訪れた。

「来場者の皆さんに『楽しい』って笑顔で言われたら、やってきて良かったなって思います。来場者の中には、亡くなったガラス職人の主人にもぜひ見せてあげたいと、形見の帽子を持って見に来られた方もいて。そういったガラスに関わるいろいろな話を聞くと、それだけで自分がガラス工芸をやる意味があったんだなって思います」

多くの人を魅了するガラス工芸の魅力はどこにあるのか。

「なかなか思うようにいかないんだよね。思い通りにならないから終わりが無い、ここまでできたから終わりというものではなくて、また次の課題がでてくる。だから面白いし、一生付き合っていけるんだなと思います」

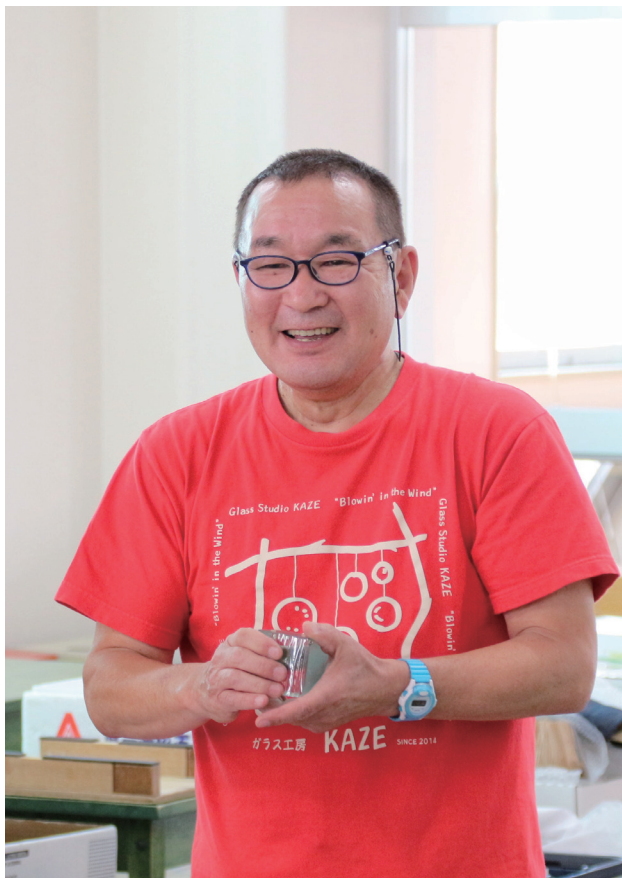
長谷川さんがこれから目指すところはどこなのだろうか。

「今はただ前を見て進んで行きたいし、こんなこともできるんだというところまで技術を磨いていきたい。そして皆さんにもガラス作品を見てもらうチャンスができればうれしいですね」そう話す長谷川さんの目は、ガラスのようにきらきらと光り輝いている。

長谷川直良

はせがわ なおよし

1954年 1月27日生まれ。教員試験に合格後、自然豊かな北海道を希望し根室市の歯舞中学校で教員になる。趣味は料理。妻と2人暮らし。



「ガラスは思い通りにならないから面白い」



11月30日、長谷川さんを講師に招き、公民館で開催した土曜サロン「ガラスの魅力」。参加者は長谷川さんにガラスの性質等を聞いたほか、とんぼ玉づくりに挑戦しました。